

平成30年度

「心の輪を広げる体験作文」

「障害者週間のポスター」

# 優秀作品集



## 発刊にあたって

札幌市保健福祉局障がい保健福祉部長 山本 真司

「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」の募集事業は、障がいの有無にかかわらず、誰もが互いに人格と個性を尊重し支え合う「共生社会」を実現するための意識啓発を目的として、札幌市が内閣府、都道府県、他の政令指定都市との共催により毎年実施しているものです。

応募いただいた作品は、選考委員会で審査を行い、今年度は、作文では中学生の部で最優秀賞一編、優秀賞二編、審査員賞三編、高校生・一般の部で最優秀賞一編、ポスターでは中学生の部で審査員賞一点を選考しております。

また、今年度は、札幌市から内閣府へ推薦した作品が全国入賞を果たしました。誠におめでとうございます。

この作品集は、これらの入賞作品をすべて収録したものです。いずれの作品も、障がいのある方とない方との心の触れ合いや、作者の皆さんが障がいというテーマに真剣に向き合い、感じたこと、考えたことを個性豊かに表現された優れたものばかりです。応募された皆さまに改めて敬意を表するとともに、この作品集により、障がいのある方とない方の相互の理解がさらに深まっていくことを願っています。

さて、障がい福祉の分野におきましては、近年、「障害者差別解消法」の施行をはじめとする、国の制度改革が進められてまいりました。札幌市においても、昨年十二月に、障がい特性に応じたコミュニケーション手段の利用を促進する「障がい者コミュニケーション条例」を施行し、また、今年三月には、手話が言語であるとの認識を普及するため「手話言語条例」を施行するとともに、札幌市の障がい福祉に関する新しい基本計画である「さつぽろ障がい者プラン2018」を策定いたしました。

札幌市としましては、このプランで引き続き基本理念として掲げた「共生社会」の実現に向けて、障がいのある方に対する理解促進や、障がいのある方の社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動への参加促進など、障がい福祉施策の充実に向け、取組を進めてまいります。

最後になりますが、選考委員の方々及び札幌市教育委員会をはじめ、この事業に御支援、御協力をいただきました多くの皆様に心から感謝を申し上げ、発刊の挨拶といたします。

## 目次

### 【心の輪を広げる体験作文】

#### 中学生の部

最優秀賞	『みんな違って、みんないい』	札幌市立琴似中学校	三年	坂本りの	2
優秀賞	『心の輪が広がった体験』	札幌市立福移中学校	一年	山下幹司	4
優秀賞	『喋れるようになったその時は。』	札幌市立東白石中学校	三年	酒井結菜	6
審査員賞	『僕とたんぽぽの六年間』	札幌市立西野中学校	一年	濱田行成	8
審査員賞	『動きが違って、言葉がなくても…。』	札幌市立あいの里東中学校	二年	佐藤花香	10
審査員賞	『自由な人』	札幌市立福移中学校	二年	藤井とう心	12

高校生・一般の部

最優秀賞 『ゆつくりでいいよ』

※内閣府「心の輪を広げる体験作文」佳作

菅原ルミ子・・・15

【障害者週間のポスター】

中学生の部

審査員賞

札幌聖心女子学院中学校

一年

西恵里奈・・・21

平成三十年度「心の輪を広げる体験作文」

「障害者週間のポスター」選考委員名簿

・・・23



# 「心の輪を広げる体験作文」

## 優 秀 作 品

### (中学生の部)

※ 本書に収録した作文は、本事業のテーマに沿って選考された優秀作品を紹介するものです。

厳密な医学的・専門的見地からは、障がいや疾病の内容を必ずしも正確に表現した記述となっていない場合も考えられますが、いずれの作品も、特定の障がいや個人を非難・中傷する意図は無く、障がいのある方との心温まるふれあいを描いたものです。そのため、明らかな誤字脱字を除き原文のまま掲載いたしております。

中学生の部 最優秀賞

『みんな違って、みんないい』

札幌市立琴似中学校 三年

坂本 さかもと りの

「お前ヤバい奴だな、九組いけよ。」

そんな言葉を耳にしたことがある。

九組とは、私の通っている中学校の中の、特別支援学級のこと。だから私はその言葉を耳にしたとき、すごく不快感を覚えた。ヤバい奴Ⅱ九組。そんなイメージを持ってしまっている人が、自分の仲間の中にいるということ。そのことに対して、同時に失望感も覚えた。

どうしてだろう。なぜ理解できないのだろう。特別支援学級の生徒だって普通の人間であるということを考えてみてほしい。もし自分が「九組いけよ。」と言われたら、相手に対してどのような感情を抱くだろうか。恐らく、怒りや悲しみといったマイナスな感情を抱くだろう。実際、私がそうだったからだ。

でも私は気がついた。マイナスな感情を抱くという

ことは、よいイメージがないのだということ。そこで捉え方を変えてみた。九組を「特別支援学級」という一つのくくりではなく、「同学年の他学級」、つまり、一組、二組、三組…と続いている九組。そう捉えるようにしてみた。そうすることで、多くの新たな発見ができた。もちろん、いい発見ばかり。

一番の大きな発見は、九組の生徒はみんな、勇気と積極性が誰よりもあるのだということ。

「おはようございます。」

登校し、教室へ向かう途中。聞き覚えのない声だが、明るく元気な声だった。通りすがりの、一人の九組の男子の声だった。

「おはようございます。」

そう返し、私は歩き出した。でも気になった。同じように、通りすがりの人みんなに挨拶をしているのだろうか。だとしたら本当にすごい。関わりの少ない人にも明るく元気な挨拶をする。そんな勇気、私にはない。自分から声をかける。そんな積極性だって、私にはない。

耳をすましてみた。明らかに聞こえる。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

このやり取りが。やっぱり、通りすがりの人みんなに



挨拶をしていたのだ。私にはないものを、九組の生徒は持っていた。誰よりも強い勇気と、誰よりも高い積極性。

それから私の中での九組のイメージは変わった。「当たり前前のこと」。代表例は挨拶。その「当たり前前のこと」を徹底することで、人間性を磨いてくれる学級。人間性が高く、豊かな生徒が集まる学級。そんなイメージに変わった。

捉え方を変えろという、たった一つの小さな行動。その一つが、私の考え方を大きく変えさせてくれた。

この経験を通して、改めて、理解しようとすることの大切さを学ぶことができた。決して、勇気ある大きな行動ではなくても、身近なことに視点を置いてみるという小さなことからスタートするだけでも、なにかが大きく変わるかもしれない。そう思うようにもなった。

今後出会う人の中には、自分と全くちがうタイプの人がいるかもしれない。そんなときはすぐに一歩引いたり、周りに惑わされて偏見を持つたりせず、自分なりにしっかりと理解していけるよう心がけたいと思う。

中学生の部 優秀賞

『心の輪が広がった体験』

札幌市立福移中学校 一年

やました  
山下 かんじ  
幹司

ぼくは、障害や障害がある人に対し、とても強い思いがあります。それは、「障害」というものを背負う人達を助け、みんな同じ輪に入るべきだ、という思いです。

この強い思いが生まれたのは、ぼくが小学校五年生の時の夏のある貴重な体験がきっかけです。その体験について、これから振り返ります。

ある日の学校からの帰り道、足の不自由な人が車いすにのって道ばたで困った様子で思い悩んでいました。様子をよく見ていると、段差があつて車いすで自力で上がれずに、困っているようでした。「どうしよう。」  
ぼくはこのとき、とても迷いました。「何と声をかけたらよいのだろう、もし断られたらどうしよう。」ぼくの心には様々な迷いが生まれました。そのとき、ある女性がその車いすの人に近づいて行きました。そして、

何かを話しかけ笑顔で、車いすを押し段差を乗り越え二人とも笑顔で別れて行きました。ぼくは、その間、その場から一步も動く事ができませんでした。二人の様子で、強く心に残ったことがあります。それは、二人の笑顔です。その笑顔は、ぼくにはとても光り輝いて見えました。困っている人にはほんの少しの勇気を出して手を差し延べることでみんな同じ輪に入ることができるのです。ぼくは自分のことが情けないと思いましたが、そして、次このようなことがあつたら勇気を持ってこの笑顔の輪に入りたいと思いました。そして月日が流れ、冬が近いある日のことです。坂道でおばあさんが重そうな荷物を運んでいました。「ぼくが助けよう。」そう思って荷物を持ちました。「ありがとう。」おばあさんは笑顔でした。ぼくは心も体もさわやかになり、とてもよい気持ちになりました。

このような経験から、ぼくは「みんな同じ輪に入るべきだ。」という思いを持ったのです。  
ぼくは、これからも、もつともつと笑顔の輪を広げ、障害者と共に生きて行きたいです。



『喋れるようになったその時は。』

札幌市立東白石中学校 三年

酒井 さかい 結菜 ゆいな

相手と会話をするときには、まず喋りますよね。ですが、それを苦とする人や、できない人もいます。

私の弟はダウン症で、まだ喋る事ができません。楽しい時や、嫌なことがあった時は声を出してそれを表現することはありますが、言葉を喋ることはありません。早く喋れるようになったら、一緒にお話できるのにな。と、何度も思ったことがあります。少しずつできることが増えてきているから、きっとそのうち喋れるようになるはず。そう思い始めたのはもう何年も前のことです。成長しているだけでも嬉しいことなのに、早く、早く。と急かすような思いはわがままかもしれませんが、でも、そう思うくらい喋ってくることが楽しみです。

ですが、あるときふと思いました。「本当に喋れるようになったとして、私は弟とちゃんとコミュニケーション

ョンをとることができのかな。」と。いきなりスラスラ喋ることができたらあまり関係ない考えかもしれませんが、昨日まで喋れなかったのに、次の日突然ペラペラ喋れるようになるのは、喋れることを隠していた人じゃないとありえない話だと思います。障がいをもっていない人たちでも、スラスラ喋れるようになるまで、なん語、一語文、二語文：と、少しずつ喋れるようになってきたはずですが、障がいがある人でも、なん語、一語文、二語文：のように少しずつ喋れるようになると思います。そういう時期に、私は弟が伝えたいことをちゃんと理解してあげられるのかな。もし理解できなかったらどうすればいいのかな。と考えました。

すると、ある時、その答えがわかる出来事がありました。学校に、弟と同じダウン症をもつ同年の男子がいるのですが、その子は少し言葉が不明瞭だけど喋ることができず。弟が喋ったらこんな感じなのか。とその子を見て何度も思ったことがあります。数ヶ月ほど前に、その子と偶然一緒に歩いていた時があって、向こうから積極的に話しかけてくれました。その時、その子がある質問をしてきました。ですが、少し不明瞭だったので、その言葉を理解することができませんでした。焦って返事を返せない私に、その子

はいつもの笑顔で何度も同じことを聞いてきました。無邪気に答えを求めてくるその子に申し訳なきを感じながら、少し落ちついて聞いてみることにしました。すると、聞いているうちにその言葉がわかるようになってきました。私にしていた質問は「今何してるの？」一緒に歩いていたら想定外の質問だったので、少し微笑ましいなと思いつつ、「一緒に歩いてるんだよ。」と言うと、その子は変わらない笑顔で「そっか。」と答えてくれました。

その時気づきました。落ちついて、相手の話にちゃんと耳を傾けてあげれば、自分に伝えたい言葉を理解してあげることができることを。思い返せばそれは聞き手としてはあたり前のことで、少し考えれば気づけることだったと思います。でも、私は気づくことができなかつた。そのことを反省しながらも、気づくことができたこの出来事に感謝しています。

会話をしている時、相手が障がいをもっていても、もつていなくても、自分が聞き手であればそんなことは関係ありません。耳を傾けてあげれば、相手の言葉を聞けます。手話でもそうです。見てあげれば、相手の言葉を聞けます。逆に自分が話し手の時は、相手に伝わるよう工夫して話せば、きつと伝わります。そのことを大切にしたいです。

いつか、待ち望んでいた時が来たら、それからずっとと弟の言葉に耳を傾けて、理解して、弟に伝わるように話していきたいです。

君が喋れるようになったその時は。

『僕とたんぽぽの六年間』

札幌市立西野中学校 一年

濱田 行成  
はまだ こうせい

僕の小学校にはたんぽぽ学級という障害などの理由で授業がふうには受けられない人たちのクラスがあった。ある年から僕はその人たちとの活動に積極的に参加するようにした。それにはある人との関わりがあったからだと思う。

その子とはようちえんから小学校六年間の八年間同じ学年だった。ようちえんの時はそこまで気にかけていなく、後から聞いた話だとその時その子は歩くのもままならないぐらいの重度の障害だったそうだ。その子に大きく心を動かさせられたのは六年生のころだ。背が低かった僕はいつもその子の前だった。運動会では入場、徒競走、よさこい、きば戦と全てその子と近かったり、同じチームとして一緒に戦ったりした。練習で移動する時一人で困っているその子を見てなんとなく

「こつちにいくんだよ、急いで。」

と声をかけた。近くにいたからこそその子が誰よりも真げんに、そしてだれよりも楽しそうにしていたのを知っていたから本当になんとなく声をかけた。それからもなんとなく困っていたら助けていたらみんなも協力してくれてもうその子が一人で困っている姿は見なかった。この時から僕はその子に気にかけるようになっていった。

そして僕がたんぽぽが好きになったのは学習発表会の日だ。劇は別々で本番までほとんどなにも知らなかったけど劇をがんばっているその姿に感動した。同級生の成長がわかった。その子は一人で、きちんと立ち、セリフを言ったりしている姿を見てすごいと思った。

その日から授業でたんぽぽにいく人を決める時も、委員会イベントについて説明する人を決める時も、なんとなくではなく、他にいないからとか、図書委員長だからとかではなく、ただ行きたいという気持ちがあった。

僕はまず最初になんとなく思ったことを、やってみるのが大切だと思った。勇気を出して一言でも言うてあげるだけでもいい。一人ではむりだったら周りの人にも手伝ってもらえばいいし、そのことで友達が増えたり、感しゃされるかもしれない。だから僕は、障

害を持っている人に助けを求められたら、すぐに助けてあげようと思う。

『動きが違っても、言葉がなくても…。』

札幌市立あいの里東中学校 二年

佐藤 花香  
さとう はなか

私が初めて「障がい」のある子と友達になったのは小学校一年生のころ、学校に一人の男の子が遊びに来たとき。先生からは事前に「今度障がいをもって男の子がみんなと交流しに来ます。」とは伝えられていたが、私はそのころ障がいって言う言葉は聞いたことがあったけれど実際にどういふことなのかはあまりわかってはいなかった。

そして交流の日になった。その男の子は車いすのようなものに座っていて体はうまく動かなくて言葉もうまく話せない子だった。でもパソコンのスライドショーをマウスでうごかし、自己しようかいをしてくれた。ゲームをするために体育館に移動するときその男の子に話しかけてみた。するとその男の子が笑ってくれた。男の子の学校の先生は「話しかけてくれてうれしいんだよ。」と言ってくれた。言葉はなくても心が通

じ合ったような気がしてすごくうれしかった。

ゲームのときに私は男の子の車いすをおす役わりになった。ゲームのときに「楽しい？」と聞くと笑顔でうなずいてくれた。その後、たくさんお話をした。好きなこと、好きなキャラクターなどなど。話すのが楽しくてあつというまに時間が過ぎてしまった。

それから1年に何回ぐらゐもその男の子と交流する会があった。5年生のときには交流会のプロジェクトのチームになった。楽しい時間はあつというまで私たちは6年生：卒業する年になってしまった。中学校に入ったらもう会えなくなってしまう。とてもさみしくなった。最後のとき、男の子はいつものようにパソコンを通じてみんなにメッセージをくれた。「いままで楽しかったです。いつかまたあいましょう。」その言葉を聞いてさみしかったけれどまたあえることを信じてお別れした。

中学生になった今、私には2つの思いがある。1つ目は障がいのある方々を「障害者」という漢字で書くことがなくなつてほしいと思う。障がいのある方々はけつして「害」をあたえるわけではない。なのに「害」という漢字をつかうのはおかしいと思う。「害」という漢字を使わずにひらがななどで表記してほしい。2つ目は障がいのある方々と私たちが対等に暮らせる世界



になつてほしい。今はまだ障がいのある方に対する偏見がある。障がいのある方は私たちと見た目が違うかもしれない。できないことがあるかもしれない。でも私たちだって1人1人見た目が違う。できないこともある。どんな人でもできないことはある。それでいいと思う。

動きが違つても楽しめる、言葉がなくても楽しめる。全員が他の人を認めあえれば全員の心がつうじあえると私は思う。

『自由な人』

札幌市立福移中学校 二年

藤井 ふじい とう心 こ

私には年の離れた足の不自由な友達があります。彼の名前はアブラハム・リーという韓国人です。私は確かにアブラハムさんが足が不自由だということは知っているのに障害があつて大変だなあと思つたことは一度もありません。そこで、改めてそれはどうしてか考えてみました。

それは、アブラハムさんが普通の人よりも多くのことができるからです。例えば三か国語を使って、奥さんや息子さんと世界中を旅をし、また自宅に世界中の友達を訪ねてきます。そして、所有している三軒の家を中も外もすべて自分でリフォームし、車を運転してどこでも行くだけでなく、車の修理もこなします。アブラハムさんが今していることを挙げたらきりがありません。なにより、アブラハムさんはいつ会つても明るく、誰よりも楽しそうです。もしかしたら、彼自

身が足が不自由であることを、あまり意識していないのかもしれない。

数年前にアブラハムさんが家の外壁リフォームのために高所作業車を購入したと連絡がありました。その時両親の反応は、「自分たちにはできない。」という驚きの言葉でした。身体的に障害がないはずの両親ができないと言ひ、歩行器のウォーカーがないと歩くことができないアブラハムさんがやると決めて、実際にリフォームを成功させたことはとても印象的でした。

身体が不自由であるのに、それを全く感じさせず、色々なことにチャレンジして成功させるアブラハムさん。身体は自由だけど、「できない」「無理」と心を不自由にして、あきらめてしまう私たち。アブラハムさんに出会つたことで「身体の不自由な人」すなわち「私たちが手助けしないと困る人」という考えは変わりました。むしろ「心が不自由な私たち」が多くのことにチャレンジする姿に教えられ、励まされています。今度アブラハムさんに会ったときには、玄関で歩行器が使いやすいように向きを変え、サポートしてみようと思います。きつとアブラハムさんはニコニコして笑つて、「ありがとう」と言つてその日もいつものように、自由に行きたい所に出かけるはずです。





# 「心の輪を広げる体験作文」

## 優 秀 作 品

### (高校生・一般の部)

※ 本書に収録した作文は、本事業のテーマに沿って選考された優秀作品を紹介するものです。

厳密な医学的・専門的見地からは、障がいや疾病の内容を必ずしも正確に表現した記述となっていない場合も考えられますが、いずれの作品も、特定の障がいや個人を非難・中傷する意図は無く、障がいのある方との心温まるふれあいを描いたものです。そのため、明らかな誤字脱字を除き原文のまま掲載いたしております。

高校生・一般の部 最優秀賞

※内閣府「心の輪を広げる体験作文」佳作

『ゆっくりでいいよ』

菅原 すがわら ルミ子 ルミこ

「三才児健診の前に少しお話したいことが……。」と保育園の担任の先生に呼ばれたのは六月の晴れた息子の三才の誕生日の一カ月前のこと。あまり良いことではないだろうと思いつつながら仕事の昼休みに保育園へ向かった。初め保育園での普段の様子を笑顔混じりで話してくれたのだが途中から「公園でお友達に砂をかけてしまったら、しかられてストレスがたまると砂を口に入れてしまうことがある。落ち着きがなく集団で何かをすることが難しい。」

視線が合わないことがあったり、片目でみたりテレビにびったりくつついてみたりと視力も気になる。一番気になるのが言葉の理解で会話のキャッチボールが上手くいかない。「等等先生達がみて息子の気になる点を伝えられ、最後に「発達の方で何か問題があるかもしれません。三才児健診の時に詳しく聞いてきて下

さい。何事も早めに対応することが大切だと思いますので……。」と一時間程の面談が終わった。

自分の子供が発達障害かもしれない……。シヨックじゃないと言ったら嘘になるが信じたくない反面、思い当たることも多々ありトボトボと職場に戻った。

その日の午後、今度は「看護部に来て下さい。」と内線が入った。産休明けで現在の病棟に配属になって二年……。『異動かな？』と緊張しながら副看護部長と面談。

「異動ですか？」とおそるおそる聞くと「違います。リーダーをお願いしようと思つて来てもらいました。」と昇格のありがたいお話だった。

五年前にただの派遣社員で入って、三年前に正社員にあげてもらっただけでも感謝だったのに今度は管理職……。神様は課題とごほうびを同時にくれたんだなあと複雑な気持ちになったものの「頑張ります！」と二つ返事で快諾した。

今年三十八歳、介護の仕事にたずさわって十七年、バツ二回、シングルマザーになって二年……。人生色々なことが起きるなあ……。本当に。

仕事柄「個性があつて当たり前」「みんな違ってみんな良い」「障害があるうがなかるうが、生まれながらでも後天的でも関係ない。その人はその人だけ」と

思いながら過ごしてきた。

しかし自分の子供のことになった時、「個性」と分かっていくつもりでも疲れていたり心が淋しい時だと頭の中では納得していても心が納得できない時があり涙することもあった。

それから一カ月して保健センターに健診に行くとき受付の人や先生、心理士さんに「お母さん大変そうですねえ」と言われ「やっぱり大変だったんだなあ……」と思っただけ涙が出た。

すぐに精神科と眼科に紹介状を書いてもらった。眼科はすぐに見てもらえたが発達の関係で説明しても理解が難しい息子には一つ一つの検査が大変だったが、眼科の先生も理解のある方でゆっくり慣れてもらう所からにしようと言ってくれた。

精神科はとても混んでいて一番早くて四カ月後に予約した。自分をだましましたし過剰な怖気持ちはつきりさせたい気持ちで四カ月後精神科のドアをたたいた。

一時間程の生まれた時から現在までの聞き取りと、その日の息子の遊ぶ様子、先生や私とのやりとりをみてすぐに「自閉スペクトラム症」と診断がついた。

もうその時にはいろいろ調べたりしていたので点と点が線になる感じがした。

どんな子であろうと私を選んで私の所に生まれてきてくれた息子を沢山の愛情で育てよう！と気持ちはすぐに前を向いた。

それからは精神科の先生の言う通り「成功体験をたくさんさせてほめてできることを増やす」を実現するためにハードルを低くたくさん準備してどんどんほめた。

保育園の先生も息子としっかり向き合ってくれ集団行動が難しい時は別の部屋で絵本を読んだり息子の気持ち準備できるまで一緒に待ってくれたり個別に対応してくれている。

スローペースではあるものの日々成長を感じられる保育園は頼もしい場所である。息子の通う保育園は母体が病院の院内保育から広がったものなので預けている人も医療人。成長の差が出やすい運動会や学芸会で息子は私の席まで走って来てしまったり演技中も走ったり落ち着かず私だけがひやひやしているものの周りには誰も振り返ったりせず「理解のある無視」で嬉しい気持ちになった。

息子が成長するということは他の子供たちも成長するので新しいクラスに上がった時に着替えボックスにチラチラ見えていた紙オムツが現在は息子の所にしか入っておらず焦りを感じることも時々あるが発達障害

のある子はトイレトレーニングもゆつくりめだと聞くので息子のタイミングを待とうと思う。

先日初診から半年経ち2度目の精神科受診に行ってきた。息子の出来るようになってきたこと、家や保育園での様子を伝えると放課後デイサービスでの療育の検討と気持ちが落ち着くようにと漢方薬の抑肝散を処方された。

漢方は苦くて飲みにくいと思い少量のお湯で溶かしコーヒー牛乳に混ぜて朝と夕食時に飲ませているが四歳の小さな子に毎日薬を飲ませることに後ろめたさがないわけではない。

薬でドロドロに息子を抑えこみたいわけではなく、ただただ息子の人生を楽しんでもらいたいだけ。一日の大半を過ごす大好きな保育園でみんなと楽しく交流できて誰かを傷つけたりせず楽しく過ごしてもらいたい。人を好きになつて、好きにもなってもらいたい。

いつも優しく全力で愛情を向けてくれる息子。私の所に来てくれてありがとう。親が子の鏡なら、その笑顔が続くよう私も毎日笑顔でいよう。毎日手をつないでゆつくり歩こう。道も人生も。



「障害者週間のポスター」

優 秀 作 品

(中学生の部)



中学生の部 審査員賞

札幌聖心女子学院中学校 1年 にし えりな 西 恵里奈





平成三十年度 「心の輪を広げる体験作文」「障害者週間のポスター」選考委員

(敬称略・五十音順)

浅香博文 公益社団法人札幌市身体障害者福祉協会会長

麻生達雄 特定非営利活動法人札幌市精神障害者家族連合会副会長

及川敏夫 社会福祉法人麦の子会教育支援部門小学校部長

長江睦子 一般社団法人札幌市手をつなぐ育成会会長

檜田英樹 札幌市教育委員会学校教育部長

山内まゆみ 特定非営利活動法人札幌肢体不自由児者父母の会会長

平成30年度  
「心の輪を広げる体験作文」  
「障害者週間のポスター」

優秀作品集

平成30年（2018年）12月発行

札幌市 保健福祉局 障がい保健福祉部 障がい福祉課

〒060-8611 札幌市中央区北1条西2丁目

電話 011-211-2936 ファクス 011-218-5181

札幌市「心の輪を広げる障がい者理解促進事業」ホームページ

<http://www.city.sapporo.jp/shogaifukushi/kokoro/>

